

●発行日：2017年3月18日（土）

〒661-0035 兵庫県尼崎市武庫之荘3-19-3 TEL 06-4962-5876 FAX 06-4962-5877 e-mail info@gakurin.co.jp

発行：教材出版 学林舎



教育の行き先 小・中学校の 学習指導要領案について

小学校・中学校の教育課程の基準となる学習指導要領は、時代の変化や要請を踏まえて、およそ10年ごとに改訂されています。次期学習指導要領は、小学校が平成32年度、中学校が平成33年度から全面的に実施されます。その学習指導要領改訂案が平成29年2月に公表されました。

文部科学省は、今回の改訂で、「子供たちが大人になる2030年ごろの社会のあり方を見据えながら、どのように知・徳・体にわたる『生きる力』を育むのかを重視していること、また、知識だけではなく、『主体的・対話的で深い学び』の視点からの授業改善をさらに充実させること、子供たちがこれからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けること」を打ち出しています。

それでは、具体的にどのような改訂がなされるのでしょうか。改訂のポイントをみてみましょう。

■小学校

○外国語科（英語）の教科化

小学校中学年で外国語活動が始まり、小学校高学年で英語が正式教科として導入されます。扱う語彙数は小3～小6で600～700語程度とされています。それに伴い、小3以上で、年間授業時間が35時間増加することになります。増加する35時間は、夏休みや土曜日を活用する案や、朝の会や休み時間などの短時間学習を活用する案などが提示されています。

○プログラミング教育の必修化

小学校で、論理的思考を学習するためにプログラミング教育が必修化されます。教科としてではなく、総合的学習の時間などを活用して、体験的に学ぶことが想定されています。

■中学校

○主権者教育の強化

選挙年齢が18歳以上に引き下げられたことを受け、主権者教育の充実が図られます。子どもたちに国家・社会の形成者としての意識を醸成させ、自分なりの考えを持つ力を育むことが求められています。また、竹島・尖閣諸島を「わが国の固有の領土」として明記するなどの改訂が行われます。

○英語による授業

中学校の英語の授業は、原則として英語で行うこととなります。中学校で扱う語彙数は、現行の1200語から1600～1800語程度に増加されます。

◇そのほか

- ・特別教科となる道徳科の充実。
- ・東日本大震災を踏まえた防災学習。
- ・年中行事や伝統的な遊び、武道などを通じた、伝統や文化に対する教育の充実。

以上のような改訂案が盛り込まれています。

「社会に開かれた教育課程」を目指して行われる今回の改訂案は、今後パブリックコメントを経て、告示されることになっています。（文／学林舎編集部）

学習教育の行き先 外国語授業を英語で 行う意味と必要性

■次期学習指導要領案と英語指導の現場

次期学習指導要領案において、中学校・高等学校の英語の授業は「英語で行うことを基本」としています。現状、実際の教育現場では、英語の授業をどのように行っているのでしょうか。文部科学省が公立中学校・高等学校を対象に行った平成 27 年度の「英語教育実施状況調査」によると、「発話をおおむね英語で行っている」または「発話の半分以上を英語で行っている」中学校教員は 1 年生で 58.3%、2 年生で 56.9%、3 年生で 54.8% となっており、高等学校教員についても各学年で 34.4%～49.6% 程度となっています。次期学習指導要領案で「基本」とされている英語での授業は、現状、約 3 分の 1 から半数の教員によってしか実施されていないとわかります。

■英語で授業を行う必要性とは？

では、英語の授業を英語で行うことの意味は何でしょうか。主には、実践的な英語力を育むためです。現在の日本の英語教育は、「英語を用いて何ができるようになったか」よりも、文法などの知識を積み上げることが主で、実践的な英語力を身につける取り組みが不十分な学校もあります。文法や語彙を学習しても、それを実際のコミュニケーションの場面で使用できないケースが多いのです。英語での授業は、英語に触れる機会を増やし、生徒が実際の場面を意識して英語を学習できるというメリットがあります。2020 年の東京オリンピック・パラリンピックの開催に伴い、日本を訪れる外国人の増加が予想されることや、今後さらにグローバル化が進んでいくであろうことを踏まえると、英語を使う機会はますます増えるでしょう。実際のコミュニケーションの場面で、間違いを恐れず積極的に英語を使おうとする態度を育成するためにも、英語で授業を行うことは必要なのです。

■実施に向けての課題とその改善案

現在は約 3 分の 1 から半数の教員しか実施できていない英語での授業ですが、それを「基本」とするにはいくつか課題があるようです。教員側の課題としては、「教員自身の英語力が足りない」という点が挙げられます。教育委員会主催の研修プログラムなどを利用している教員もいるようです。生徒側の課題としては、「授業で使用されている英語が理解できない」という点が挙げられます。中学校・高等学校ともに、教員は生徒の理解の程度に応じた英語を用いるよう、十分配慮して授業を進める必要があります。また、ただ英語で授業を行えばよいということではなく、先に述べたように、実践的な英語力を育むということが本来の目的です。そのためには、最終的なゴールを意識した授業計画を練る必要があります。学習到達目標を示す CAN-DO リストを指導に活用するというのも 1 つの方法です。これにより「英語を用いて何ができるようになったか」が明確になり、生徒は自信を持って英語を使うことができます。また、教員も生徒も最終的なゴールを見据えた上で、授業を進めることができるのです。

■全面実施に向けて

～これからの英語教育に求められること～

授業を英語で行うことの必要性と課題について述べてきましたが、本来の目的は、生徒が実践的な英語力を身につけることであるということをお忘れはいけません。そのことを踏まえた上であれば、英語で行われる授業は生きた英語に触れるよい機会になるでしょう。ただし、教員は生徒と最終的なゴールを共有しながら、達成に向けて必要な文法や語彙を結びつけて定着させていく必要があります。また、小学校で英語が教科化されることで、現在よりもさらに小学校と中学校、高等学校の連携が求められるでしょう。グローバル社会において、英語を用いてコミュニケーションを図ることができる人材を育てるために、各教育機関は協力し、授業計画を充実させることが求められています。(文/学林舎編集部)

学習教育の行き先 算数どこでつまずく わり算(3けた÷2けた)

第1回に引き続き、算数でつまずきやすいといわれている単元の内容を分析していきます。第2回は、第4学年で履修する「わり算(3けた÷2けた)」です。わり算は、第3学年から学習し、ある数量がもう一方の数量のいくつ分であるかを求める場合と、ある数量を等分したときにできる1つ分の数量を求める場合に用いられます。

第3学年では、「 $24 \div 6$ 」のような九九を1回用いて商を求める計算、「 $60 \div 3$ 」のように、わられる数が何十で、わられる数の十の位の数がわる数でわり切れる計算、「 $84 \div 4$ 」のように、わられる数の十の位の数と一の位の数がそれぞれわる数でわり切れる計算などを学習します。第4学年では、「 $75 \div 5$ 」のように、わられる数の十の位の数がわる数でわり切れない計算を、筆算のしかたとともに学習します。その後、「 $756 \div 21$ 」のように、わる数を何十とみて商の見当が必要となる計算を学習します。

「3けた÷2けた」の計算でつまずきやすいポイントとして、①筆算するときの商を立てる位置、②商の見当、③筆算の手順の複雑さの3つを挙げて、その原因と対処法を以下にまとめます。

①筆算するときの商を立てる位置

「3けた÷2けた」の計算をするとき、わられる数の百の位に商は立ちません。例えば、「 $756 \div 21$ 」の計算では、百の位の計算は $7 \div 21$ で百の位に商は立たず、十の位の計算は $75 \div 21$ と考えて計算を進めます。筆算するときの商を立てる位置でつまずいてしまう原因として、商が立つ位のきまりが理解できていないことが考えられます。ここでつまずく子どもたちには、どの位から商が立つのかを確認させ、縦の位がずれないように位をそろえて書く練習をさせることが有効的だと考えられます。

②商の見当

「3けた÷2けた」の計算では、まず、わる数を何十とみて商の見当をつけます。例えば、「 $756 \div 21$ 」の

計算では、百の位に商が立たないので、わる数の21を20とみて十の位の計算を $75 \div 21 \rightarrow 75 \div 20$ と考えてから商を「3」と見当をつけます。商の見当でつまずいてしまう原因として、答えと大きくはなれた数から検証していくと、時間や手間がかかり、苦手意識が芽生えてしまうことが考えられます。「 $75 \div 5$ 」の計算では、わられる数の十の位の7をわる数の5でわって商に1を立てることが、頭の中で楽に処理することができます。しかし、わる数を何十とみて商の見当をつけるときは、2けた以上の計算を行わなければなりません。ここでつまずく子どもたちは、計算の見積もりや簡単な暗算の力が身につけていないことが多いです。商の見当が苦手な子どもたちには、わる数に近い何十の数を使うのがよいことを理解させ、根気強く計算して商を見つけさせるよう指導することが有効的だと考えられます。

また、商の見当でつまずいてしまう原因には、見当をつけた商が正しいかどうかの判断ができないことも考えられます。ここでつまずく子どもたちは、わり算の基本的な考え方が身につけていないことが多いので、ひいておろした数がわる数より小さくなることを理解させながら指導していくことが有効的だと考えられます。

③筆算の手順の複雑さ

わり算の筆算は、「立てる、かける、ひく、おろす」を分けられなくなるまでくり返します。筆算でつまずいてしまう原因として、計算の各段階での意味が十分に理解できていないことが考えられます。たし算やひき算では、一の位から順にたし算またはひき算だけをしていけば答えを出すことができます。しかし、わり算では、計算の各段階での意味が異なり、かけ算やひき算などいろいろな計算をしなければいけません。ここでつまずく子どもたちには、計算の手順を形式的に指導するのではなく、計算の各段階での意味を理解させながら指導していくことが有効的だと考えられます。

今回は、第4学年で履修するわり算(3けた÷2けた)について分析しました。わり算は、第5学年以降でも履修する大切な単元です。つまずくポイントをおさえたい指導をしていくことで、第5学年以降もスムーズに理解できるよう、はたらきかけていくことが大切です。

(文/学林舎編集部)

All English Text

*MM Publicationsの英語教材は、全世界80カ国以上で使用されています。

GET SMART

GET SMART is an innovative six-level primary course in American English.

英語で考え英語で書く教材

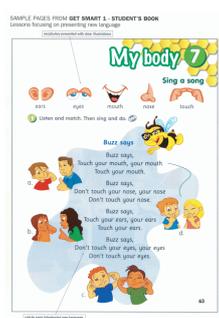
GET SMARTの特徴は、科目学習としての英語教材ではなく、**言語学習としての英語教材**です。科目学習の英語教材の多くは、日本語で英語を理解するための学習教材です。しかし、言語学習としての英語教材は、**英語を英語で理解するための学習教材**です。そのため、日本語での解説などは一切ありません。すべて、英語です。

小学英語学習指導が活発化する中、GET SMARTを通して、「**英語は英語で考える**」ワンランク上の**学習指導**を学林舎は推進します。



- ・GET SMART 1~6 Student's Book 各1,890円(1,750円+税)
- ・GET SMART 1~6 Workbook with CD-ROM 各1,365円(1,264円+税)
- ・GET SMART 1~6 Teacher's Book 各3,150円(2,917円+税)
- ・GET SMART 1~6 Class CDs 各3,675円(3,403円+税)

Student's Book - 5つのテーマ別学習



1. Sing a Song

詩から新しい単語、語彙を学習。



2. Smart kids

新しい単語、語彙を文章から学習。



3. Once upon a time

Smart Kidsで学習した単語、語彙を別の視点から学習。



4. Let's play

作業学習を通して、新しい単語、語彙を学習。



5. Story time

ショートストーリーから新しい単語、語彙を学習。

* GET SMART詳細
 型版:A4版
 英語種類: American English
 ページ数:
 Student's Book 1~6 平均120ページ
 Workbook 1~6 平均90ページ
 Teacher's Book 1~6 平均180ページ
 Level: 英語導入レベルからスタートし、英語で思考できることを目標に設定されています。
 出版社: MM Publications



- **Phonics**学習
Level 1~4の巻末ではPhonics学習。
- **Grammar**学習
Level 5~6の巻末ではGrammar学習。
- **Project**
学習者が楽しみながら学べる工夫がされています。

GET SMART Teacher's Book *解説はすべて英語です。



GET SMART Workbook



クロスロード Crossroad

第 67 回 文 / 吉田 良治

● 高校野球とセカンドキャリア

3月に入りプロ野球のオープン戦、そして今年はワールドベースボールクラシック(WBC)が開催され、日本代表の活躍で野球が熱い春の到来となりました。そして3月後半はいよいよ春のセンバツ高校野球も始まります。先月のCross Roadではアスリートとライフスキルを取り上げましたが、今回は高校球児のセカンドキャリアでさらに深堀をしていきます。

昨年秋に何度も甲子園で優勝している名門校のある高校球児から連絡を受けました。この球児は怪我のため、野球をあきらめないといけない危機に直面し、野球をやめた後の人生に不安を抱え、引退後のセカンドキャリアについて真剣に考えていました。彼は、そんな不安の中、米国・ジョージア工科大学でアスリートのセカンドキャリアについて調べていました。調べていく中で「トータル・パーソン・プログラム」について知りました。このプログラムについて詳しく知りたい、と色々探していたら私の名前に行き着いたそうです。大学進学を迎え、スポーツ推薦以外の選択肢、そして大学卒業のその先にある実社会での生活など、これまで真剣に考えてこなかった野球以外の生き方について深く考えていました。

私は彼との対話の中、トータル・パーソン・プログラムも取り上げている“ライフスキル・フィットネス(岩波ジュニア新書)”“日本の大学に入ると、なぜ人生を間違えるのか(PHP研究所)”の2冊の著書を紹介しました。日米の学生アスリートの生き方の違いや、スポーツへの取り組み方、そして教育に対する姿勢など、様々な違いを理解しながら、アスリート以前に一人の

の人間として、本来養っておかなければいけない教養全般について彼は理解を深めてきました。そして高校卒業後の生き方を明確にし、大学の推薦入学(スポーツ推薦ではなく一般推薦入試)に備えました。そして年末には大学の推薦入試に見事合格も果たしました。

この若者が経験した怪我という突然訪れた挫折、そしてそこで見つけた新しい人生の生き方(野球のバットの使い方だけでなく、人生を生き抜くためのバット=ライフスキルを持つ意味)は、今後の人生において必ず役立っていくことになるでしょう。

彼が在籍した高校は今年のセンバツ高校野球に出場します。そして過去の大会同様頂点を目指します。数々の名選手を輩出し、甲子園制覇という栄光をつかんだ歴史あるチームが、必ず優勝するという保証はありません。そして高校で活躍した選手が、高校卒業後も野球で活躍し続ける保証もありません。先月も取り上げたように毎年NPBが発表する、若手プロ野球選手のセカンドキャリアの調査でもわかるように、突然引退の日が訪れ、別の生き方を見出すことが迫られたとき、“私には野球以外何もない”では、これまでの努力は無駄になってしまいます。

今回取り上げた高校球児の見出した新たな生き方について、より多くの方と共有できればと、私が担当しているFM大阪の番組“みんなともだち”(毎週土曜日 午前8時25~30分)では、この元高校球児をゲストに招き、彼の野球人生とライフスキルについての考えを共有することにしました。3月18日と25日に放送いたします。3月19日からはセンバツ高校野球も開幕します。彼の経験が今回の大会に出場する、そして甲子園を目指すすべての球児たちへのメッセージとなれば幸いです。(つづく)

吉田良治さんプロフィール

1962年生まれ。1998年にワシントン大学へアメリカンフットボールコーチ留学。2000年リーグ制覇、2001年ローズボウルに出場し、ローズボウル制覇に貢献。国家レベルのリーダーシップ教育に貢献した、ランブライト元ワシントン大学ヘッドコーチよりリーダーシップ教育を学ぶ。

全米の大学で人格形成プログラム普及に貢献した、ライス元ジョージア工科大学体育局長よりライフスキル教育を学ぶ。

吉田良治さんBlog
<http://ameblo.jp/outside-the-box/>